

2022 年 6 月

食料安全保障月報 (第 12 号)



令和 4 年 6 月 3 0 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 6 月食料安全保障月報（第 12 号）

目 次

概要編

I	2022 年 6 月の主な動き	1
II	2022 年 6 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナ情勢を受けた豪州、カナダの生産動向等 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は前年度に比べ 5.5% 増加も、ここ 20 年で 2 番目に少ない	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 5 割以上増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4% 下回るも 30.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ 輸出量は世界第 2 位となる見込み	
	＜中国＞ 小麦生産量は前年度に比べ 3.2% 増加の 138.5 百万トン	
	＜ロシア＞ 小麦輸出量は世界第 1 位	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ 47.4% 減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 減産に伴い輸入が史上最高の見込み	
	＜インド＞ 単収の向上により生産量が 7 年連続史上最高を更新	
	＜中国＞ 世界の期末在庫量のうち、中国の割合は 6 割弱	
	＜タイ＞ バーツ安や低価格他国産米への需要シフトで輸出価格は下落傾向	
	＜ベトナム＞ 2021/22 年度の夏秋作の作付けが開始。進捗率は約 4 割。	

II	油糧種子	
	大豆	21
	＜米国＞	生産量は史上最高、輸出増の見通し
	＜ブラジル＞	2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し
	＜アルゼンチン＞	2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続
	＜中国＞	増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
	＜カナダ＞	収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し

(参考) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23 年度)・・・ 27

特別分析トピック 1

インド、トルコ、エジプトの小麦政策

特別分析トピック 2

「食料の安定供給に関するリスク検証 (2022)」について

【利用上の注意】

表紙写真：中国山東省の冬小麦の収穫（6 月 7 日撮影）

当該圃場では天候に恵まれ前年度より単収が増加した。

(概要編)

I 2022 年 6 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は成熟期で、一部では収穫が開始された。その他の作物は作付けがほぼ終了し、生育期を迎え、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、6 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ウクライナの小麦生産量・輸出量が前年度より大きく減少し、国際相場は過去最高を更新した後も、高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通し。ウクライナの生産量は前月より上方修正されたものの、前年度よりは生産量・輸出量が減少している。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：5 月）については、肉類（121→122）が過去最高、穀物（170→173）が上昇したものの、植物油（238→229）、乳製品（147→142）が下落した影響により、4 月より下落（158→157）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、6 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の6月15日プレスによれば、ロシアの侵攻により、農業分野で農地や農業機械など合計で43億ドル（5,600億円相当：1ドル=130円で換算）の被害があったとしている。

ウクライナ農業政策食料省の6月17日プレスによると、小麦の大半を占める冬小麦は650万ヘクタール(※)作付けされ、6月現在、成熟期を迎え、今後収穫期を迎える。また、ウクライナ農業政策食料省によると、春作物の作付けは終了し、生育期を迎えている。6月16日時点で作付面積は1,416万ヘクタール（前年度1,692万ヘクタール）。うち、春小麦は19万ヘクタール(※)作付け、とうもろこしは464万ヘクタール（前年度550万ヘクタール）となっている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23年度のウクライナの小麦生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、5月見通しと変わらず対前年度比35%減の2,150万トン、輸出量も5月見通しと変わらず、対前年度比47%減の1,000万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、作付面積が予想より増加したため、対前年度比では41%減も、5月見通しからは550万トン上方修正され2,500万トン。ただし、輸出量は、ロシアの侵攻により黒海の輸出港の封鎖が続いているため、対前年度比で61%減の900万トンで据え置かれている。この結果、期末在庫量は積み上がり、小麦ととうもろこし計で1,800万トンを超える見通し。

このような情勢に対し、USDAは16日、被害をうけた農業分野への支援を含めた農業協力のMOUをウクライナ農業政策食料省と締結することを公表した。

※前年度の冬小麦、春小麦の作付面積を比較するデータは公表されていない。

1 米国の春の作付け遅れの改善と生産見通し

米国農務省（USDA）によれば、6月19日時点の2022/23年度のとうもろこしの作付けはほぼ終了し、大豆、春小麦の作付けの進捗率はそれぞれ、94%、98%と、作付けの遅れは5月下旬以降の天候の回復により改善している。一方、冬小麦については収穫が開始され、収穫進捗率が25%と前年同期（15%）、過去5年平均（22%）と進展しているが、作柄評価は「良からやや良」の比率が乾燥の影響もあり、30%と前年同期（49%）を下回っている。

春作物については現時点の作付～初期生育段階で2022/23年度の見通しをすることは難しい。USDAによれば、前年度の春小麦の記録的な減産からの回復に加え、冬小麦の生産見通しが5月からわずかに引き上げられたことから、小麦計で前年度比5.5%増の4,730万トンの見通し。とうもろこしは肥料価格高騰に伴う作付面積減により、5月見通しから変わらず、対前年度比4.3%減の3億6,730万トンの見通し。一方、大豆も5月見通しから変わらず、作付面積増から前年度より4.6%増で史上最高の1億2,630万トンの見通し。

6月30日に作付面積調査結果が公表される見通しで、市場関係者の間では、当初よりとうもろこしの作付面積が増加するのではとの見方もある。とうもろこしは7月以降、作柄を大きく左右する受粉期を迎えることから、今後の生育状況が注目される。

2 ブラジルの冬とうもろこし収穫が開始され、史上最高に

大豆収穫後に作付けされたブラジルの 2021/22 年度の冬とうもろこしは、ブラジル食料供給公社（CONAB）の 6 月見通しによれば、2020/21 年度に引き続き干ばつの影響を受けたものの、作付面積の増加から、前年度比 45%の増加の 9,040 万トンが見込まれている。夏作と冬作の合計では、1 億 1,520 万トン（前年度比 32%増）で史上最高となる見込みである。

6 月に入り、収穫が開始され、主産地のマットグロッソ州では 6 月 10 日時点で収穫進捗率は 16%となっている。7 月以降、収穫・輸出も本番を迎えるとみられる。なお、5 月下旬に中国はブラジル産とうもろこしの輸入の植物検疫上の問題をクリアし輸入に合意しており、従来中国が輸入してきたウクライナ産とうもろこしの代替として、今後輸入に向けて諸手続きが行われるとみられる。

Ⅱ 2022 年 6 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、5 月末、390 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、ウクライナ産輸出の期待から一時 380 ドル/トン台前半に値を下げたものの、黒海地域からの輸出に対する懸念が強まり 400 ドル/トン前後まで値を上げた。その後、6 月の米国農務省需給報告で米国産冬小麦の生産量が引き上げられたことや、米国産冬小麦の収穫の進展等から値を下げ、6 月下旬現在、350 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、5 月末、290 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まり、堅調なエタノール生産に加え、6 月後半からは米国中西部の高温・乾燥予報に伴う作柄悪化懸念等から緩やかに値を上げ、6 月下旬現在、300 ドル/トン前後で推移。

コメは、5 月末、480 ドル/トン前半で推移。6 月に入り、2017 年以来のバーツ安に加え、イラクやアフリカ諸国からの需要が低下したことから値を下げ、6 月下旬現在、価格は 440 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、5 月末、610 ドル/トン台後半で推移。6 月に入り、大豆の堅調な国内需要や原油相場の上昇等から 6 月上旬に 650 ドル/トンと 2012 年 9 月の史上最高値に迫る水準まで値を上げた。その後は、中国需要の伸び悩み懸念や欧米のインフレや経済成長の減速懸念に伴うその他金融市場の下落等を背景に値を下げ、6 月下旬現在、610 ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 260 万トン上方修正され 27.7 億トン。消費量は、前月予測から 90 万トン下方修正され 27.9 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.2%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で下方修正も、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され、27.7 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦で下方修正、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され、27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は 6 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.1%となる見込み。

(注：数値は 6 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：ウクライナ情勢を受けた豪州、カナダの生産動向等

ウクライナは、ロシアの侵攻前は2,000万トン前後の小麦を輸出してきたが、ロシア侵攻以降輸出量は大きく減少した。一方、カナダは前年度の干ばつから穀物の生産、輸出が回復するとみられ、豪州も降雨に恵まれ穀物は3年連続の豊作が期待されている。世界の主要小麦輸出国の状況を中心に穀物の貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は 2022 年 7 月から 2023 年 6 月。国や作物によって異なる。(品目別需給編 P. 27 参照)

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

米国農務省 (USDA) の 2022 年 6 月の需給見通しによれば、ウクライナの 2022/23 年度の小麦生産については、ロシアによる侵攻を受け、史上最高であった前年度比 35%減の 2,150 万トンで 5 月見通しから据え置かれた。輸出についても減産に加え、インフラ等が被害を受けたことや、ロシアによる黒海のおデーサ港等主要輸出港に対する封鎖が続いており、対前年度比 47%減の 1,000 万トンで据え置かれた。とうもろこしについても輸出量が 900 万トンで据え置かれている。

なお、ウクライナは、鉄道輸送により、ルーマニアやポーランドを経由した輸出も検討してきた。しかし、ウクライナと EU の鉄道の軌道幅の相違等の課題から以前の輸出量の完全な代替は難しく、3 月以降の小麦を含む穀物輸出は侵攻以前の毎月 600 万トン前後から毎月 100 万トン程度へと大きく減少している。

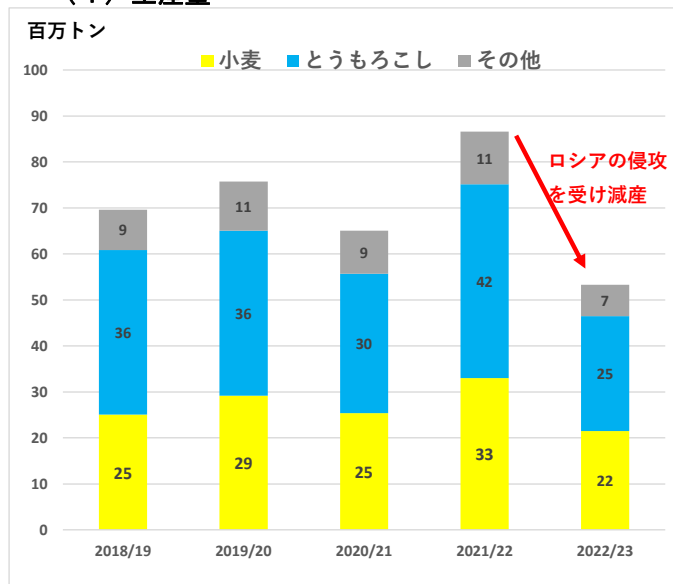
(2) 国際相場への影響

この結果、2021/22 年度の北米産の干ばつによる小麦の減産や中国の需要等から上昇してきた小麦相場は、2 月 24 日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3 月 7 日には史上最高値 (14.25 ドル/ブッシェル) を更新し、その後下落したものの、6 月現在も依然として 10 ドル前後で推移している。

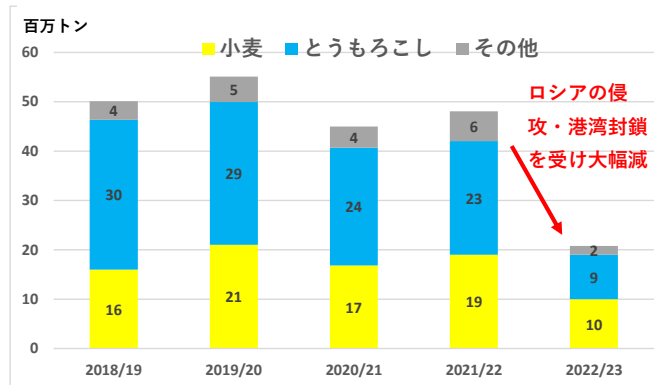
6 月 3 日には、アフリカ連合の議長国セネガル・サル大統領がロシア・プーチン大統領と会談した。報道等によると、サル大統領は、アフリカ諸国は、戦争前は年間 3,000 万トンのロシア・ウクライナ産小麦、とうもろこしを輸入している。ロシアによるウクライナ侵攻や欧米の対ロシア経済制裁による影響を受けており、その改善を訴えたとみられる。

図 1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

2 カナダの生産と輸出動向

(1) 作付け動向

2022/23 年度の生産量は干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復する見通し。作付け・初期生育の段階ではあるが、カナダ農務農産食品省（AAFC）の予測によれば、穀物・油糧種子全体で、一昨年の豊作時には及ばないものの、現時点の見通しでは、前年度のカナダ西部の干ばつの影響から回復し、前年度比 32% 増の 8,650 万トンの見

通し。主産地のプレーリー(平原 3 州)では、西部のアルバータ州では乾燥が継続していたが、6 月に入り降雨があり、作付けは順調に進展した。一方東部のマニトバ州、サスカチュワン州などでは雨がちな天候で洪水もあり、6 月中旬時点で作付けは完了していない。

(2) 小麦

2022/23 年度の生産量は干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復する見通し。作付け・初期生育の段階ではあるが、AAFC によれば、単収の改善に加え、菜種からの作付けのシフトによる収穫面積の増加もあることから、史上最高の豊作だった 2020/21 年度には及ばないものの、前年度比 53% 増の 3,310 万トンの見通し。

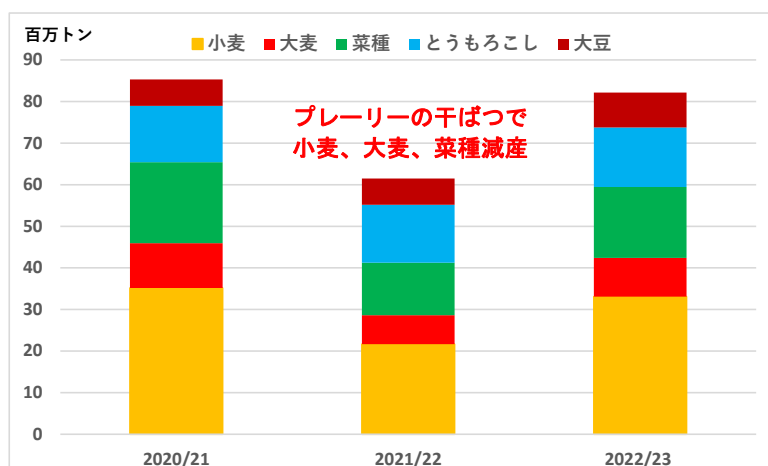
USDA の 6 月見通しによれば、輸出量は、生産量の回復により、前年度より 55% 増の 2,400 万トンの見通し。

(3) 菜種

AAFC によれば、小麦同様、2022/23 年度の生産量は、干ばつの影響を受け減産となった前年度から回復するものの、小麦への作付けのシフトから前年度比 35% 増の 1,800 万トンにとどまる見通し。

USDA によれば、輸出量は、生産量の回復により、前年度より 76% 増の 880 万トンとなるも、2020/21 年度の輸出量 1,060 万トンよりは下回る見通し。なお、中国当局から輸入を規制されていた 2 つの穀物輸出業者からの輸出が 5 月には解除されている。

図2 カナダの小麦、大麦、菜種、とうもろこし、大豆の生産量の推移



出典：AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(2022. 6)

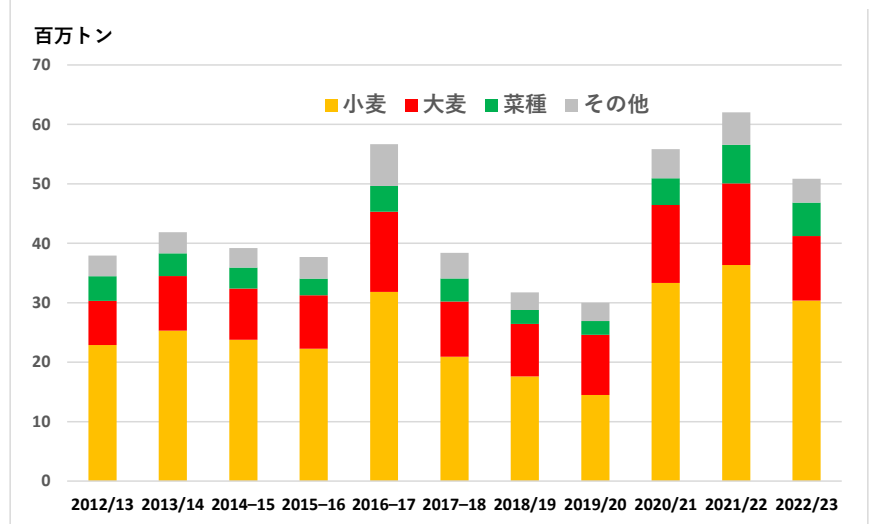
3 豪州の生産と輸出動向

(1) 作付動向

豪州農業資源経済科学局（ABARES）の「Crop Report」（2022.6.7）によれば、2022/23年度の作付面積は前年度の史上最高水準よりわずかに減少も 2,340 万ヘクタールの見込み。

大麦などから小麦(1%増)や菜種(12%増)に作付けがシフト。2022/23年度の冬作物の生産量は 5,090 万トンで史上 4 位の見込み。

図3 豪州の冬作物（小麦・大麦・菜種）の生産量の推移



出典：ABARES「Crop Report」（2022.6）

(2) 小麦

「Crop Report」（同）によれば、生産量は、史上最高の豊作であった前年度からは対前年度比 17%減産となるものの、過去 10 年平均を 22%上回る 3,030 万トンの見通し。西オーストラリア州、ニューサウスウェールズ(NSW)州とも 2 月から 4 月にかけて平年並みあるいはそれ以上降雨に恵まれた。5 月には NSW 州等で洪水による作付け遅延もあったが、概ね作付け、初期生育は順調に進展している。

USDA の 6 月見通しによると、輸出量は、前年度より減少するものの、高水準の 2400 万トンの見通し。特に前年度のカナダ、米国の干ばつによる減産、本年 2 月のロシアのウクライナ侵攻、5 月のインドの小麦輸出規制などから、各国の需要が集中し、輸出スロットの確保が難しい状態が継続している。

(3) 菜種

「Crop Report」（同）によれば、2022/23 年度の菜種の生産量は、史上最高の豊作であった前年度より 14%減産となるものの、小麦と同様、作付期の降雨に恵まれ、菜種は過去 10 年平均を 47%上回り、前年度に次ぐ史上 2 位の 560 万トンとなる見通し。

USDA によると、輸出量は、対前年度比 14%減も、高水準の 420 万トンの見通し

4 世界の穀物貿易への影響

6 月 10 日、ウクライナ農業政策食料省は、カナダの庶民院とのオンライン会合で、輸出できない穀物在庫が 2,000 万トン以上にのぼること、今年の秋には 1,000 万～1,500 万トンの穀物貯蔵能力が不足することなどを訴えた。

これに対し、当面、2022/23 年度の穀物収穫に向け、ウクライナ西部の国境沿いにサイロを増設し、当面の収容力を確保しようとする動きも報道されている。

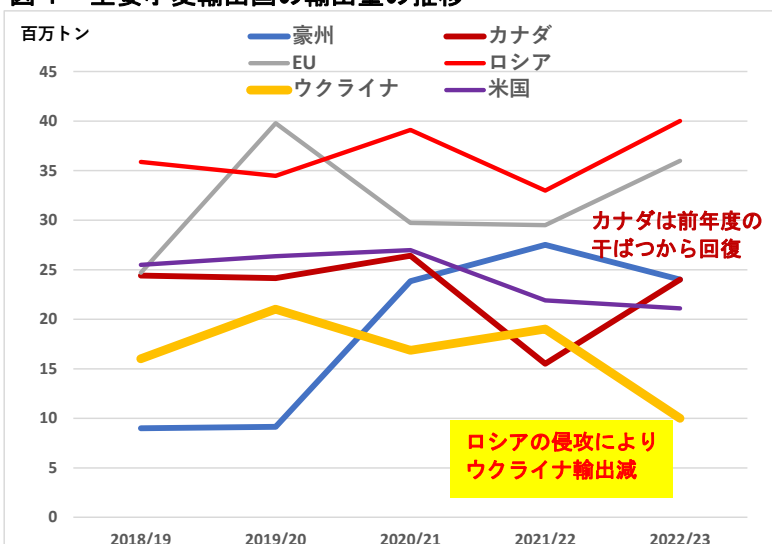
小麦の輸入国においては、インドが条件付きではあるが、小麦の輸出規制を行ったこともあり、7 月以降、新穀の収穫が開始される EU 産、ロシア産か、3 年連続豊作が予想される豪州産を中心に手当てを行うことになるとみられる。ロシア産については、対ロシア向け経済制裁を実施していない中東、アフリカ諸国向けに黒海からの穀物輸出が継続されているとみられる。輸出価格の高騰に伴い、6 月末には小麦、大麦で 100 ドル/トンを上回る水準に上昇している可変輸出

関税は、7月以降も継続されるものの、6月まで設定されていた小麦800万トン等の輸出枠は解除される見通し。一方、EU産は主産地のフランスでの高温乾燥により作柄が懸念されている。

こうしたことから、カナダ産小麦の収穫が始まる9月までは、豪州産小麦に集中が継続するとみられ、輸出スロットの確保が課題となっている。引き続き注視をしていく。

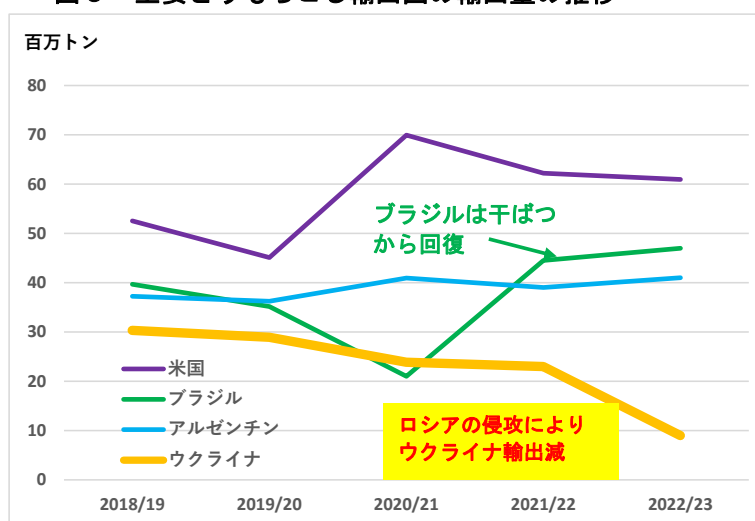
また、とうもろこしについても、USDAによれば、2022/23年度のウクライナ産は前年度41%減の2,500万トンとなる見込みで、それに伴い輸出量も前年度比61%減の900万トンとなる見通し。一方で、2021/22年度のブラジル産は、史上最高の生産量（前年度比33%増の1億1,600万トン）となる見込みであり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン（前年度比2.1倍）となる見込み。

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

図5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

「食料の安定供給に関するリスク検証（2022）」について

我が国の食料の生産や供給をめぐる国内外の状況は刻々と変化しており、特に近年、新型コロナウイルスの感染拡大やロシアによるウクライナ侵略といった新たなリスクの発生により、食料安全保障上の懸念は高まりつつある。

このため、農林水産省内に「食料安全保障に関する省内検討チーム（チーム長：武部農林水産副大臣）」を立ち上げ、将来にわたって我が国の食料安全保障を確立するために必要な施策の検討に資するよう、食料の安定供給に影響を及ぼす可能性のある様々な要因（リスク）を洗い出し、包括的な検証を行い、6月21日に公表した（結果概要は特別分析トピック2を参照）。

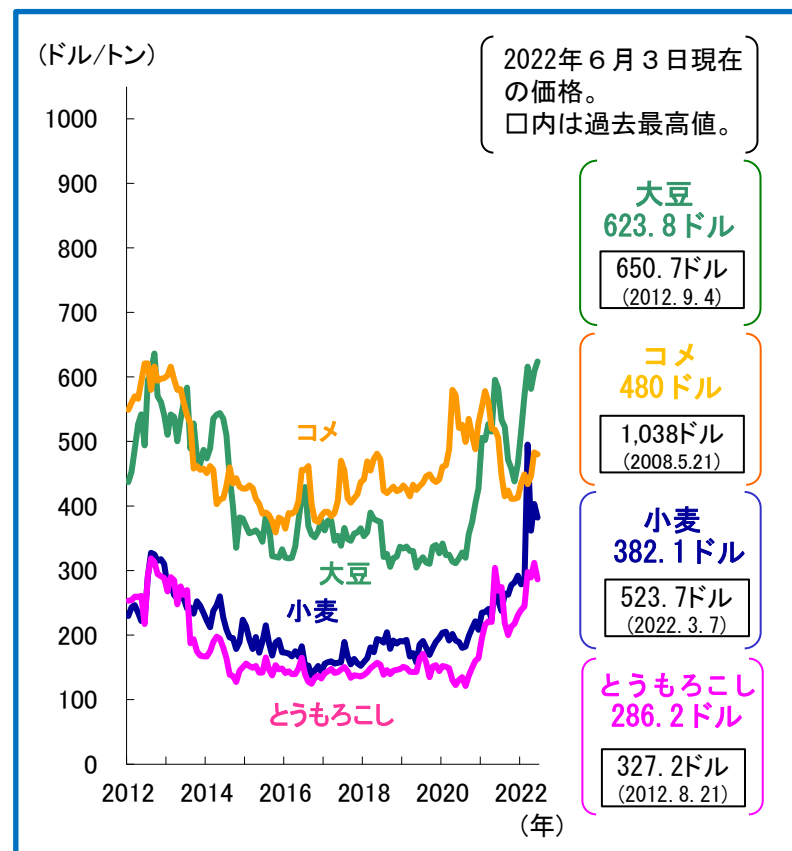
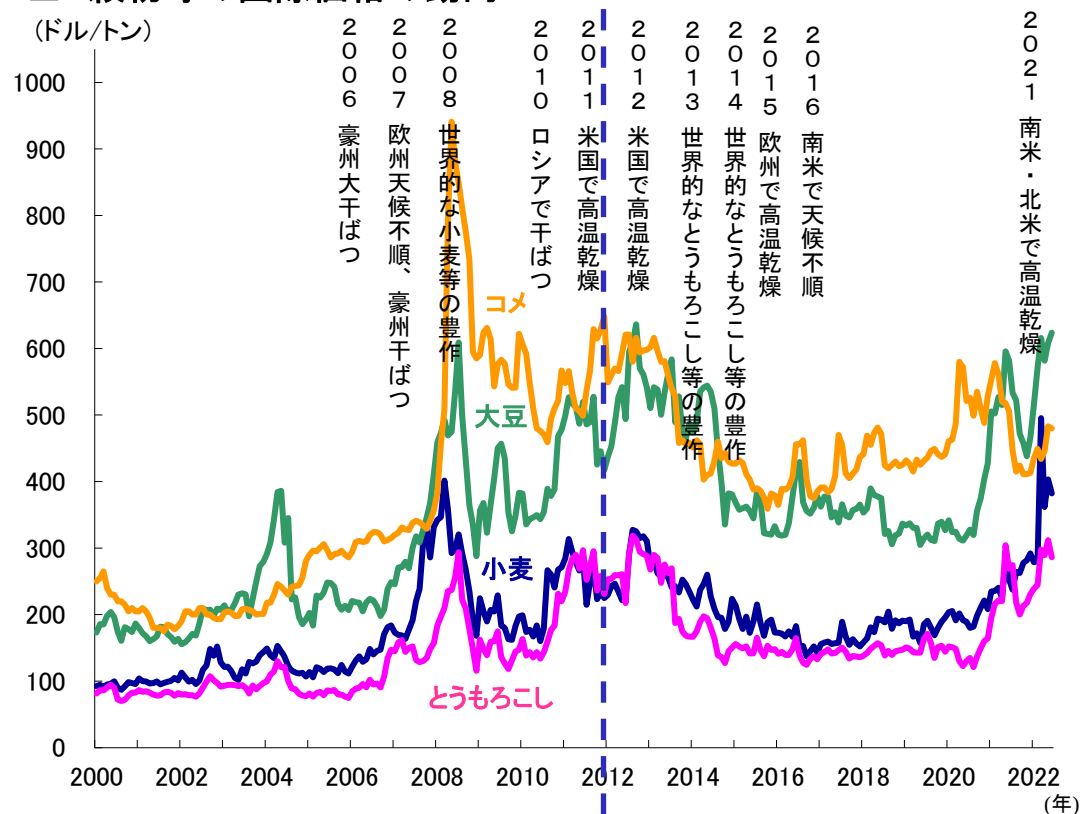
結果の詳細については以下をご覧ください。

農林水産省ホームページ：https://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/anpo/220621_14.html

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



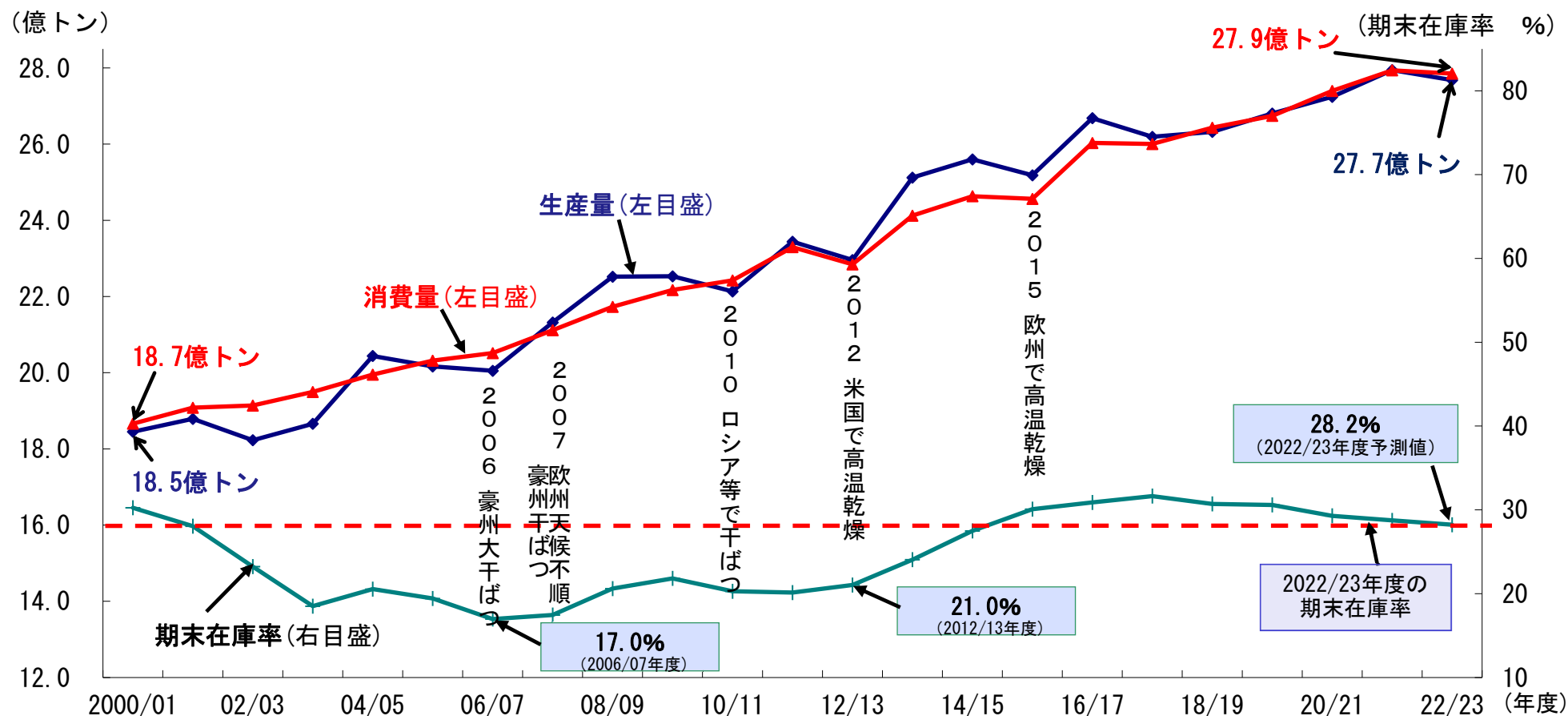
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.2%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

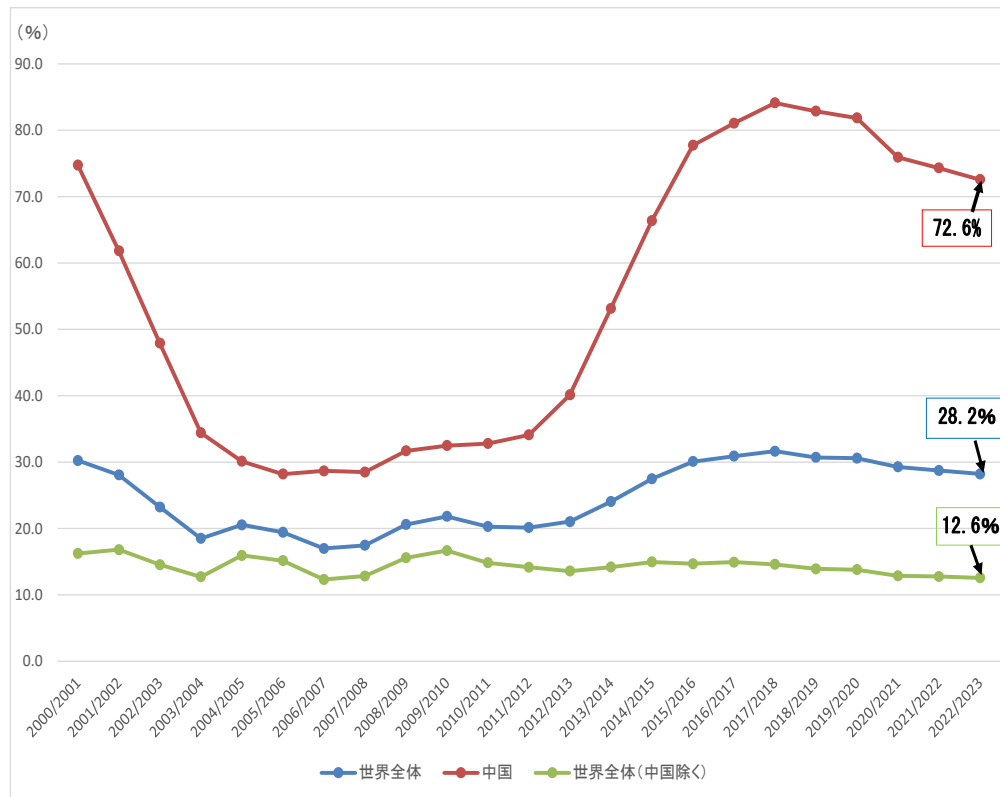


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(June 2022)、「PS&D」

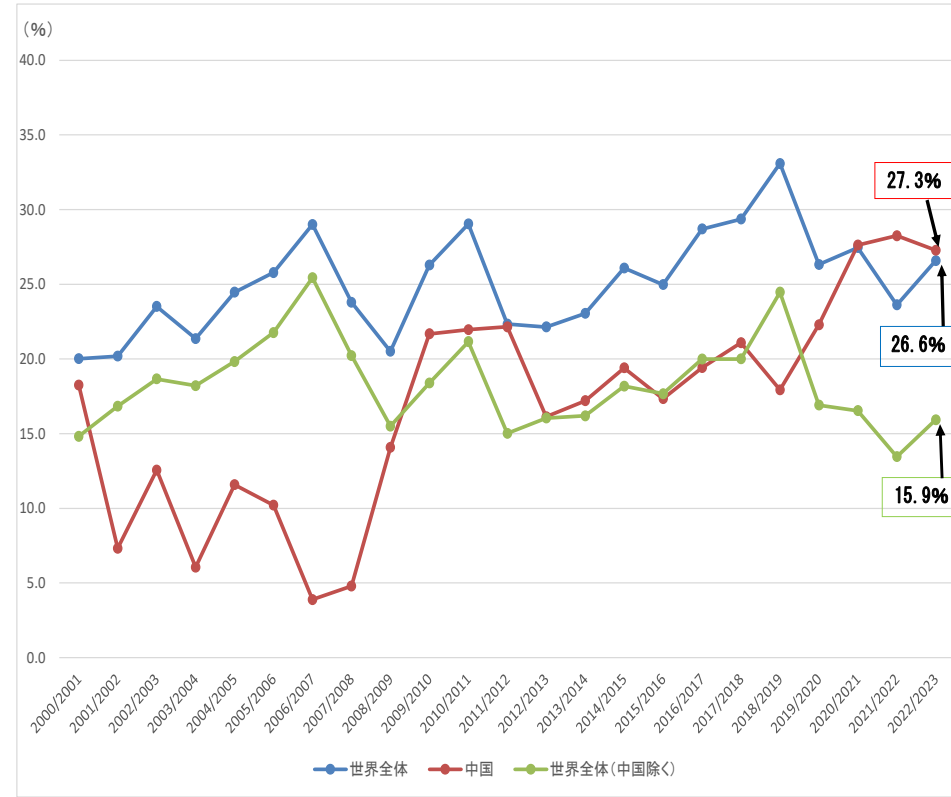
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(June 10, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

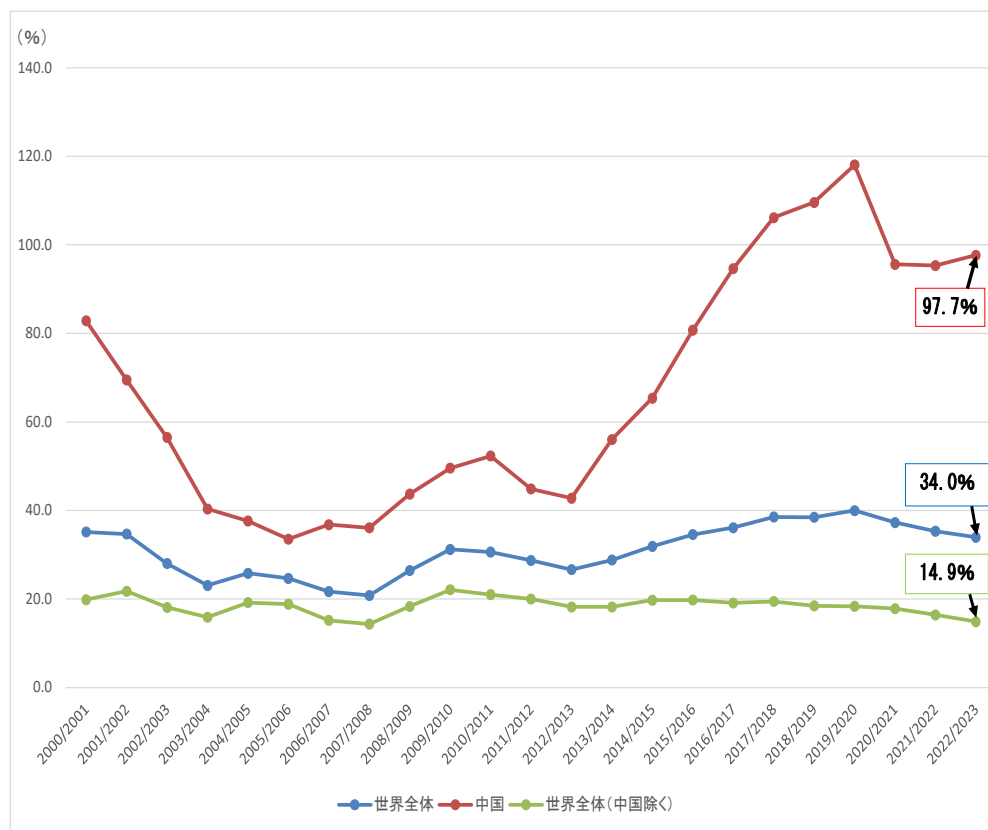
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

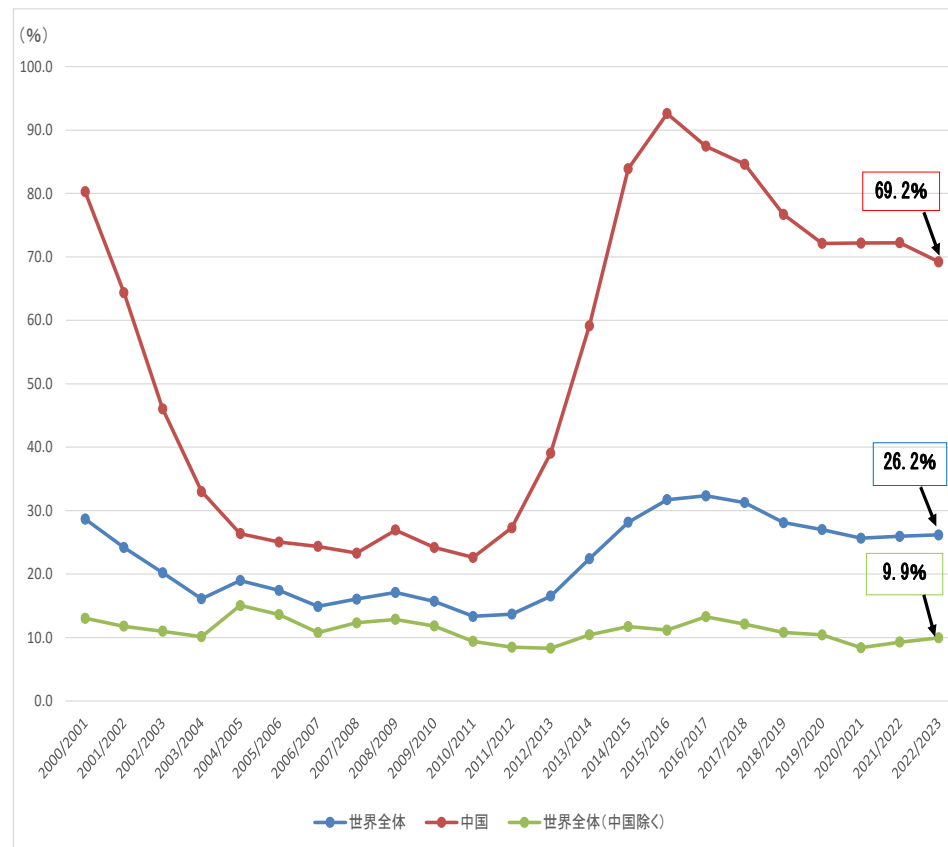
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(June 10, 2022)

注: 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出货量 - 輸入量) × 100

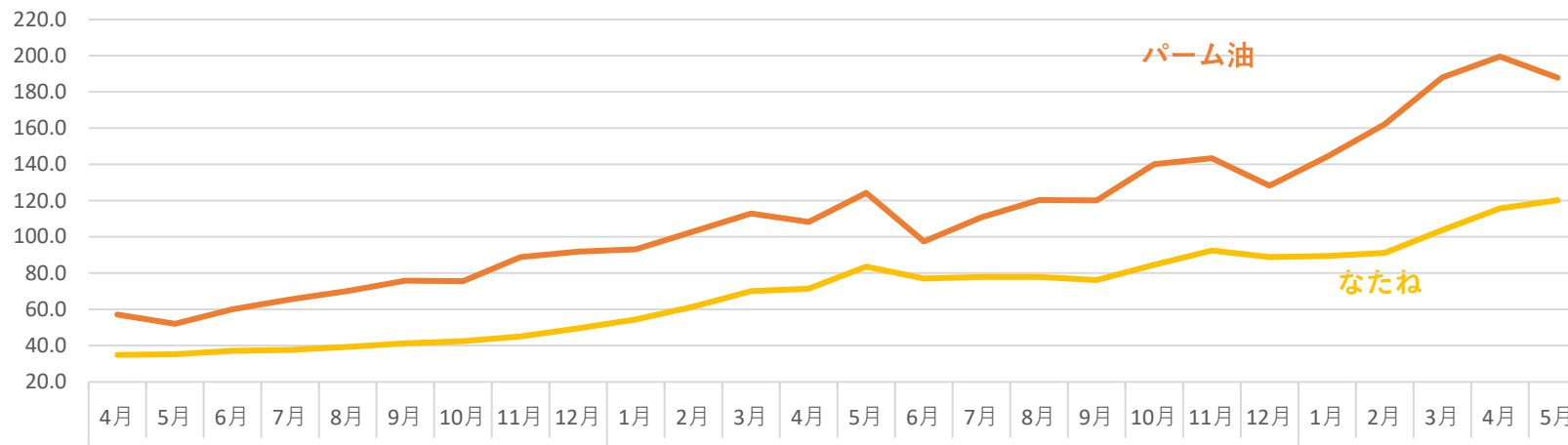
3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出货量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出货量) × 100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

(千円/トン)

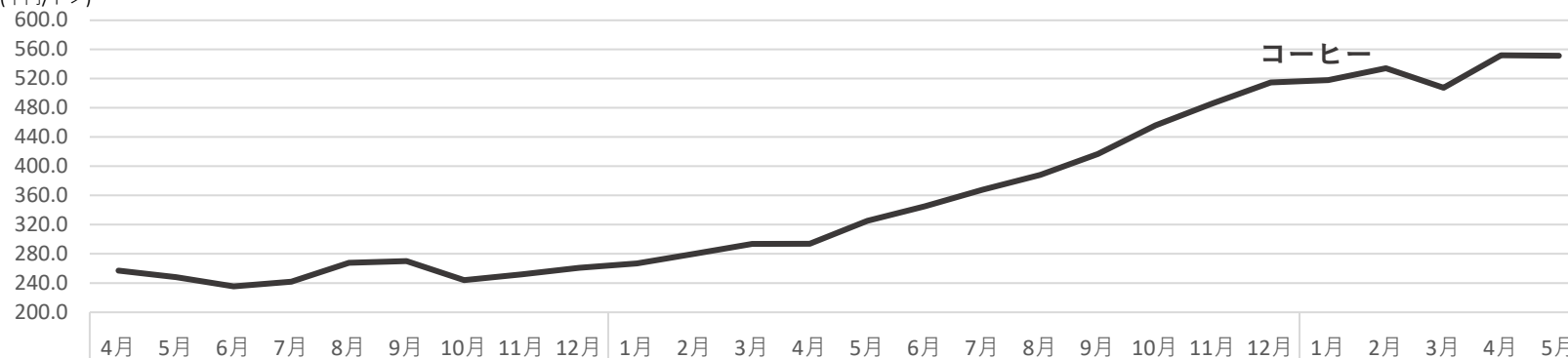


2022年6月20日現在
□内は2020年4月以降
の最高値。

パーム油
199.5千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
120.3千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

(千円/トン)



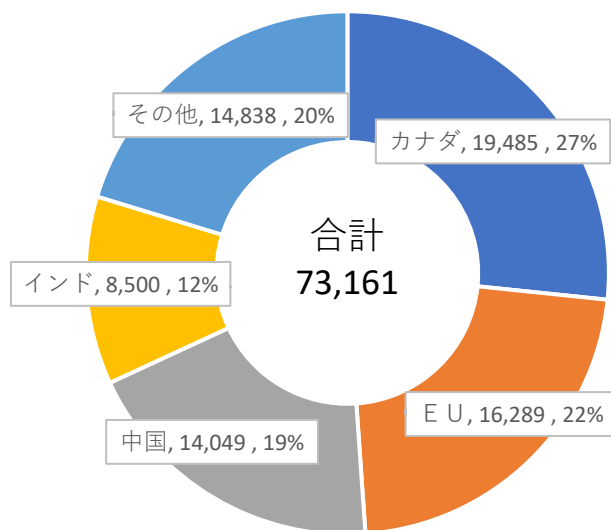
コーヒー
552.1千円/トン
552.1千円/トン
(2022.4)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

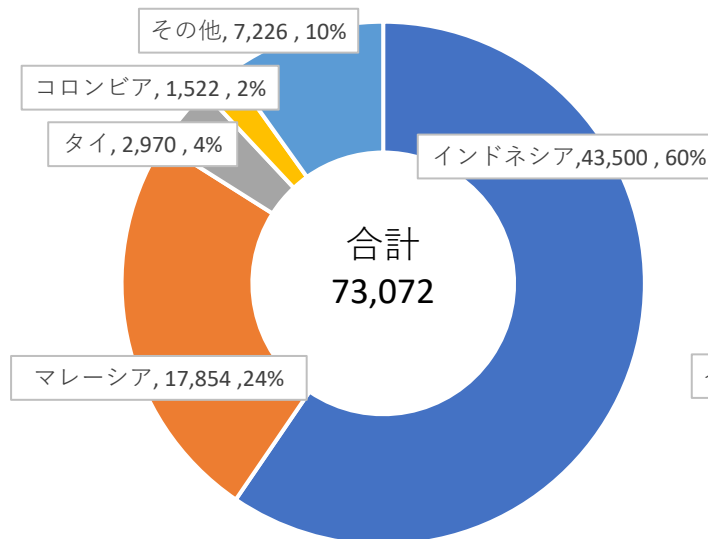
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



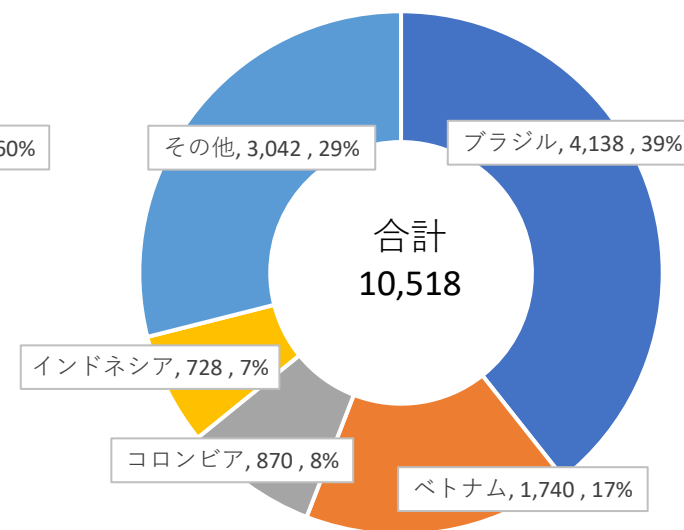
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年				
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年5月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.5～135.4(前年同月比で－0.4%～36.2%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年12月～令和4年5月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	100.0	103.2	107.1	107.2	108.0	107.5	9.4%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	98.5	100.4	100.9	100.9	100.1	100.1	0.4%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.5	102.3	102.1	102.9	103.1	104.0	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	121.6	124.6	128.4	132.2	134.8	135.4	36.2%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	97.6	98.3	99.0	99.9	100.7	101.0	1.0%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.0	112.3	113.3	120.3	123.9	126.1	25.4%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	95.3	98.5	100.2	99.3	103.0	105.3	7.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	99.5	-0.4%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	100.9	101.2	101.5	101.9	102.4	102.6	2.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年12月～令和4年6月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.4	102.1	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	1.2%	7.6%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	97.8	98.4	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	11.1%	10.4%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	100.7	101.6	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	0.5%	2.6%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	116.3	119.1	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	1.5%	32.6%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	97.5	97.7	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	-0.8%	-1.0%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.6	105.9	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	0.9%	19.5%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	92.1	98.6	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	0.5%	12.8%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	0.0%	-0.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年7月号（6月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）第1四半期の牛肉輸出は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002257.html

（豪州）牛肉輸出量は低迷も、中国向けは比較的堅調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002258.html

（中国）牛肉生産量は増加傾向も、引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002259.html

◆豚肉

（EU）2月の豚肉生産量は前年同月比3.7%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002260.html

（チリ）2021年豚肉輸出量は4年ぶりに減少に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002261.html

◆鶏肉

（米国）国内の需要増により鶏肉価格は大幅上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002262.html

（ブラジル）鶏肉生産量、海外からの堅調な需要を背景に引き続き増加傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002263.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価は記録的高水準、好調な乳製品の輸出

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002264.html

（EU）2022年第1四半期の乳製品の輸出量は前年同期比減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002265.html

（NZ）牧草の生育不良により新シーズンの生乳生産も低調の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002266.html

（中国）生乳生産量は増加、乳製品輸入量は大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002270.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ生産量、わずかに減少見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002267.html

（世界）南米の生産回復などから大豆の生産量、輸出量はともに増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002279.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ生産者平均販売価格、12/13年度以来の高値予想

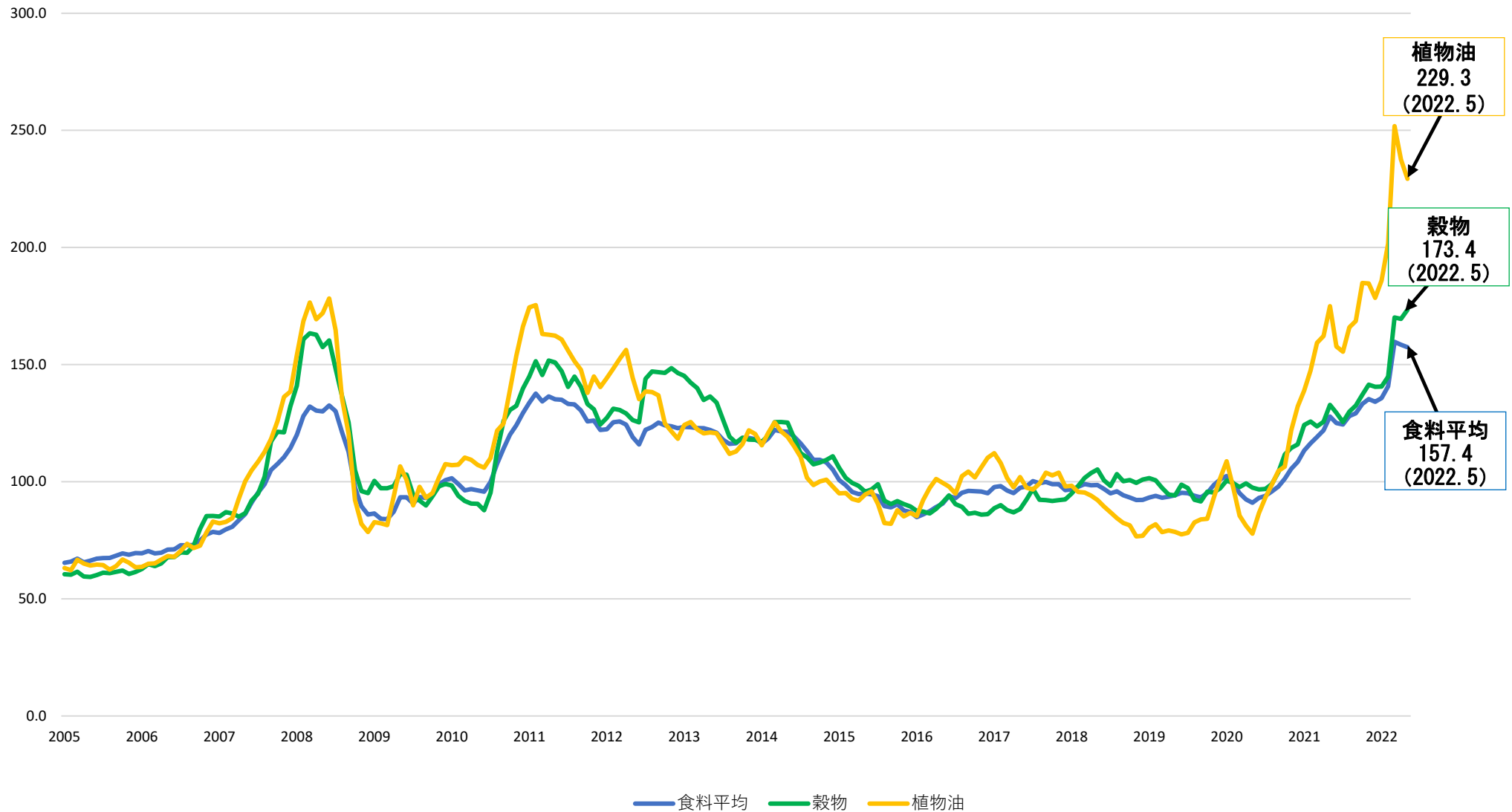
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002268.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002269.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.6)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等